

吉野川市指定史跡

川島城址

城跡は標高40mの「城山」と呼ばれる丘陵一帯に展開している。北麓は吉野川中流域右岸に面し、船着き場に適した湾入地形である。また、南麓は伊予街道に面しており、水陸ともに交通の要衝であったことがわかる。

築城に関する資料は残っていないが、1573(天正元)年に現在の川島町^{くわむら}栗村^{うえざくら}の植桜一帯で起こったという上桜合戦^{うえざくら}において功績のあった河島兵衛之進が三好氏から領地を与えられ築城したといわれる。1585(天正13)年に蜂須賀氏が阿波に入国してからは、徳島城の支城である阿波九城の一つとなり、林図書助能勝(道感)が城番となったが、幕命の一国一城令によって廃城となった。城が築かれた山は「古城山」と呼ばれ、現在は本丸、二ノ丸、三ノ丸の痕跡とみられる地形が残っている。また、川島神社参道の大鳥居から現在の国道192号を挟んで南に延びる伊予街道沿いは、郷町として繁栄した町並の名残が垣間見える。

なお、城跡の東側にある現在「川島城」と呼ばれている鉄筋コンクリート造の建物は、1981(昭和56)年に勤労野外活動センターとして建設されたものである。



吉野川市指定無形民俗文化財
西出目八幡神社で行われている

湯神楽の神事



湯神楽は古代社会の習俗であり、江戸時代中期にもおこなわれていたという伝承があるが、江戸時代にはすでに珍しい行事であったという。

神事は毎年1月9日午前9時に始まり、宮司と総代、氏子が大神の前に正座する。早朝に境内にしつらえた大神の四方に忌竹を立て、注連縄を張り、大神に湯を沸かして大祓いを奏上する間に榊の葉を1枚ずつちぎって大神に入れる。そのうちに湯が沸きたつと氏子の数(120戸)だけの束ねた笹の束(たぶさ、あるいはたぐさという)を宮司が湯に浸して参列した氏子に振りかけて祓い清め一年中の厄を払う。その後、4本の御幣を立てた竹筒に沸いた湯を入れ神前に供え、祝詞を奏上して神事は終わる。

お-2

吉野川市指定有形文化財(彫刻)

彫刻木造 如来坐像

木造彫刻の如来坐像である。真言宗御室派瑠璃山薬師寺の本尊で、南北朝時代の作といわれる。像高52cm、台座高40cm、寄木造である。内刳(像内部を刳り抜く)で、表面は漆を塗った上に金箔を押している。頭部は前後で2材を接合し、体部と首の穴に柄を差し込むことにより接合しており、眼は彫り込んでいる。体部は前後で別の木材を2材、左側面は1材、膝前の横材、裳先1材をそれぞれ接合している。両肩で両手を接合し、右肘でも接合している。両手首の先は、後世に別の材料で補修されている。天正年間(1573~1592)に長宗我部軍が当寺を攻めた時、本尊が蜂の大軍となって襲いかかったために兵火を免れたという伝説がある。作者は不明。



き-1

吉野川市指定天然記念物(植物)

川島神社のイブキ



樹周は2.83m、幹は地上から高さ2m付近で多数分枝して伸びている。徳島県内では3番目の太さであるともいわれる。樹齢や由来については不明であるが、川島神社が1916(大正5)年にこの地に座する以前よりあるものといわれている。

川島神社の御神燈



御神燈 文政五年壬午五月吉日
海上安全 願主新田與右衛門

き-1

海上安全と彫られ、当地の藍商が藍玉輸送の航路の安全を祈願し奉納したといわれている。

き-2

か-3

か-4

チェリーロードライン



川島町から美郷に繋がる県道43号線沿いに桜が植えられており、「チェリーロードライン」として親しまれている。

桜の時期には、美郷字古土地の国登録有形文化財にも登録されている村田旅館前の広場では、美郷さくらまつりが開かれている。



吉野川市指定無形民俗文化財

七十五膳の神事



川島神社において秋の例大祭の儀式の後におこなわれる神事である。川島神社は、1916(大正5)年10月20日に吉野川改修工事により社地移転を余儀なくされた浮島八幡宮を中心として旧川島町内の多くの神社を合祀してできた神社である。神事は、①修祓、②宮司一拝、③献饌(供物を宮司他神職、総代が供える)、④大祓、⑤祝詞奉上、⑥豊栄の舞奉納、⑦玉串奉奠、⑧撤饌(宮司他神職、総代が供物を下げる)、⑨宮司一拝の順でおこなわれる。

七十五膳という名称は、神饌をたくさん用意して75台の三方にお供えすることに

吉野川市指定名勝

水神の滝

雄滝、雌滝、お茶淵という3つの滝を総称して「水神の滝」という。

最大の落差は雄滝で、約20mである。湯吸山の縦横に起伏した谷底の溪流がなす滝である。雄滝から20m上流に雌滝、雌滝から30m上流にお茶淵がある。昔は滝の上に水神を祀り、干ばつとき、神職が滝つぼに入って祈ると、不思議に雨が降ったという言い伝えがある。滝の名称は、水神の祠に由来するという。

谷をさかのぼった岩の断面には白蛇が群がり躍る紋様があり、蛇石と呼ばれたという。また、滝の周辺には紫雲石があり、藩政時代には、「お祭め石」として領外への持ち出しが禁止されていたという。



き-1

よる。神饌は清浄なものでなければならず、品数も非常に多いので、早くから宮司や総代らが農家に依頼しておく。献饌、撤饌では神職と総代は一同榊の葉を口にくわえ、神饌に一礼して目の高さまで掲げて奉仕するのは、神饌に息がかからないようにするためである。献饌は手送りで順次本殿に供される。撤饌では逆の順路で神饌所に下げ、再び棚に並べる。祭事は10月の第4日曜日におこなわれている。



神饌所に安置された75台の供物

吉野川市指定天然記念物(植物)

広幡八幡神社の桧

樹高約19m、樹周約3.31mのヒノキの巨樹である。ヒノキは常緑高木で、その名は「火の木」の意味とされ、古くはこの木をこすって火を得たためであるともいう。一般的には直径は1mほどまでにしかならないといわれている。広幡八幡神社境内にあり、当社の神木として植えられたという。広幡八幡神社は、下方の磐石八幡神社を下の宮というのに対し、上の宮ともいう。当地の伝説によると、月野にいた忌部氏の一族といわれる今鞍進士という人物が、古柁(今の古土地)に移り住んで、近くの栗木の清流のほとりに九州宇佐八幡宮の分霊を迎え、自身の祖先である天日鷲命も併せて祀り、広幡八幡宮と名付け、東山の総氏神としたという。棟札により1868(慶応4)年の建立であるといわれている。



吉野川市指定有形民俗文化財

川島の浜の地蔵

川島字城山の「岩の鼻展望台」の下、西側の吉野川に面した麓、川島の浜(川湊)に立ち、周辺の地面の高さから基礎部分を含めて台座高が2m67cmあり、吉野川流域の台座が高い地蔵のなかでは第3位である。

吉野川に溺死した人々の冥福を祈って供養のため、1843(天保14)年4月に建立され、以来、川湊に出入りする船の安全を見守ってきた。台座には、三界萬霊(過・現・末の関係者の霊を祀る碑という意味、供養塔と同じ)と題して、銘文が刻まれ、願主として、川島の有力な藍師・藍商だった姓と同じものが刻まれており、川島の浜は吉野川の川湊として栄えていたことから、藍玉を運ぶ船の安全を願い設置されたとも考えられている。

2021(令和3)年7月16日には、日本遺産「藍のふるさと阿波~日本中を染め上げた至高の青を訪ねて~」の構成文化財に追加認定された。



き-1

東山鉾山跡



東山鉾山は元禄年間に発見され、県下第一の鉾山という意味で「太郎鉾山」とも言われていた。江戸時代には一時、阿波の三大鉾山の一つとして盛んであったが、その後廃山になっていた。

明治時代に入って、再び開坑の動きが始まり、明治末から大正はじめが最も盛んな時代であった。大正2年には電灯が灯り、店がならび、病院や郵便局もあった。盆暮れの映画は、村の人たちの楽しみであった。昭和35年に廃山になり、いまは大きなボタ山が往時の活況を忍ばせている。

き-3